

## 災因としての死霊と邪術

— キプシギス族の場合

### 1 序

1—1 はじめに この論文の目的は、死霊と邪術とがキプシギス族の災因論の中でどのように位置づけられているかを明らかにし、次に、それを通じてキプシギス族の災因論の全体的構造に或る程度の展望を得ることにある。

病気を初めとする不幸は、個人の具体的で個別的な経験であると同時に、或る社会に固有の文化現象としても現われる。キプシギス社会では、不幸は、世界の個人に對する作用が示す徴候の一つとして感知される。不幸に陥る事によって、即ち、異常の認識、徴候の解説、原因

の同定、対処法の実施の諸過程を経験する事によって、不幸の経験者は、個人、社会、世界における諸存在のあり方（社会・文化的分類体系）と、それらの相互連関のあり方（コミュニケーション体系）を、身をもって感得し、考究し、了解する。

従って、個人の不幸の経験の具体的な諸過程には、キプシギス文化の象徴体系シンボリズムにおける意味するものと意味されるものとの諸関係の認識とそれへの働きかけ、即ち、既存の世界観の確認と新たな状況に即した再解釈の試みとが見出される筈である。そこで、この論文の最後では、世界観のうちでも、世界を支配し動かしていると考えられている超人間的な諸力についての諸観念と社会構造や

小 馬 徹

感情との相互連関を手短かに考察する。

1—2 キブシギス族 キブシギス族(人口約六〇万人)は、言語、文化的にはバラリナイル語系のカレンジン諸族に属し、ケニア西南隅の高原地帯に居住する。伝統的に、雑穀の焼畑耕作もする移動牛牧民だったが、二〇世紀初頭に英国植民地政府の支配を受けて定住化し始め、トウモロコシや茶の栽培を行うようになった。生計を大きく農耕に依存するようになって今日でも、牛牧民を強く自認し、牛は中心価値として、言語、社会、宗教的なコミュニケーションの核となっている。

二〇〇余りの外婚的氏族があり、夫々支氏族に分れるが、リニジは形成されず、また地域集住化も見られず、氏族の成員は全領土に広く分散する。結婚後の居住規制が新居制であり、共妻達も夫々遠方に分住するために、家族や親族も地縁集団化しない。社会的エチケットの基本的な準拠枠ともなる年齢組体系や、父系出自原理に基づいて形成され、かつてはあらゆる戦闘行為の組織原理であったが現在ではほぼ実質的な機能を失った、ボリエット(*boriel*)と呼ばれる組織も、他の社会組織から独立して、それらを横断するように形成されている。

日常生活の基盤は散居状の地域、或いは近隣組織であり、現実には、互助や協働も家族や親族よりも近隣組織に大きく依存している。現在は、国家行政の末端機構としての行政首長を受けいれているが、伝統的には、首長などの中央集権的な政治機構を持たず、基本的な法的機能は、現在でも、長老裁判を行う単位でもある近隣組織にある。

## 2 人生観——理想と行動パターン

キブシギス族の人々は、少くとも表面的には、肯定的で樂觀的な人生観を持っているように思える。伝統的な人生の理想は、他部族から一頭でも多くの牛を略奪し、一人でも多くの妻を娶り、一人でも多くの子孫をもうけることである。牛と妻と子孫は富と威信の象徴であり、それによって晩年の栄誉と福祉を確保し、死後の安寧と子孫への靈魂の再来を確信して安んじて死んでゆけるのである。これが一般的な人生観であり、多くの者が達成できる筈の人生の目標であった。

世界の創造主であり、森羅万象の背後にあり、世界の調和を維持している唯一神 *Asis* は、本来恵み深く、

神意に背かない限り安寧を約束していると人々は言う。老人達は、自分達こそが世界の中心であるかの如く、自らの存在に限りない矜持を示し、如何なる權威にも盲従しない。北方からの極く小さな移住者集団に過ぎなかった人々が、僅か二〇〇年余りの間に、マサイ族、グシイ族、ルオ族などの近隣諸族を殆んど一方的に掃討して今日の一大部族に発展を遂げたと言う歴史的背景と、元来中央集権的でない社会・政治構造とが、この樂觀的で個人主義的な人生観の形成に少なからぬ関連を持っているだろう。

今日の若者の人生の理想は、良い学歴を得、ケニアと言う国民国家の中で高い地位と大きな財産を獲得する事である。彼等の人生観もまた樂觀的だ。小学校や中学校の全国一斉卒業資格認定試験が彼等の人生の行方を左右する関門だが、先輩達の惨憺たる成績を熟知しているがら、合格評点四段階中の最高級か次高級で合格すること誰も毫も疑わない。この底抜けの楽天性は、傍目にも滑稽な程だ。

キプシギス族の人生についての文化理論または理想を一言で要約すれば、普通の人が普通に暮してゆく限り、

幸は神によって約束されている、と言う事になろう。従って、この理想に基づく限り、病氣などの不幸とは、ゼロと置ける、当り前で幸な状態が、何らかの超人間的な力の作用によってマイナス状態に陥っている事であり、治療などの対処法は、これを当り前のゼロ状態に戻す事である。

だが、キプシギス族の実際の行動パターンは、理想とは相当隔っている。乳幼児死亡率が高く、病氣が猖獗し、卒業資格認定試験は難しく、就職は困難を極めるのが現実である。それでも、無時間的に言う限りは、平穩無事な暮らしをゼロと置き、不幸をマイナスと置くのが文化理論でもあり、通常の現実的なあり方と言えよう。だが、通時的に人生を見れば、誰しもが病氣に苦しみ、不幸を嘆いた経験を持つ事こそが常態である。だから、平穩無事なのが過不足無い人生(ゼロ)であると言うのが一般的な人生観ではあっても、通時的にゼロである事は、正常であるよりはむしろ異常であると考えられているのである。

キプシギス族の、現実の行動レベルにおける人生観を如実に表しているのが、「印付きの者」(tagenyoy)と

モンセット (*mong'set*) の二つの観念だ。

子福者たる事は、人生の理想の重要な一部分であつても、実際には、依然として周産期死亡率も乳幼児死亡率も低くない。すぐ上の兄弟姉妹に先立たれた者は、出生直後に耳朶に切傷を付けられると共に、ひよめきの回りを除いて髪を剃り落したり、穴あき錢の腕輪を付けたり、種々の儀礼を施されて「印付け」される。三人以上の子供が次々に死んで育たなかつた場合には、次に生まれた子供は、月経の閉止した老女に連れ去られ、道端や土豚の古い巢穴などに一旦捨てられ、別の老女に拾われて連れ戻される。これらの特別な儀礼行為を「印付け」(*hotages*) とも「何かする事」(*uzawo*) とも言い、これを施された者を「印付きの者」と言う。「印付きの者」には、その印付けの仕方に従つて、「穴の子」、「小錢の子」、「道端の子」などの特殊な名が付けられる。親達はい付きの子供の名前を尋られた時には、「ハイエナ」とか「獣」とか「人にあらず」とか答えなければならぬ。「人にあらず」がそのまま名前になる事もある。道端はハイエナの出没する所であり、土豚の古い巢穴はハイエナの巢穴でも、先立った兄弟姉妹が埋められている墓穴

の象徴でもある。印付きの子供とは、ハイエナに連れ去られた子供であり、墓穴に埋められた子供であり、子を産む筈のない老女の子供であり、言い換えれば、死んだ子供、存在しない子供である。それ故に「人にあざる者」なのである。印付きの者の名は奇妙だがよくある名前である。この事実が、乳幼児死亡率の高さを端的に物語っている。<sup>(1)</sup>

モンセット (*mong'set*) とは、「未必の故意」とでも訳せる概念だ。即ち、完全には実現していない幸を先取りして喜んだり、誇ったり、或いはそれに言及する事によって、災厄を呼び込まずには済まない状況または力を作り出して了う事である。だから、自分のものであれ、他人のものであれ、子供や牛を賞めたり、その数の多さを讃えたり、病人に回復を請合ふのは大変に忌み嫌われる。印付けの目的の一つはモンセットから子供を保護する事である。

多数の牛を得、多数の妻に多数の子供を産ませ、家族が病氣もせず、繁栄を謳歌するのは、一般的な人生観ではあつても、その実現は例外的な果報であつて、——理想のレヴェルではゼロであり正常であるけれども——現

実の行動レベルでは過剰(プラス)であるが故に異常である。この過剰に幸な状態は、それ故、適度にマイナスである常態よりも一層大きな不幸を招き得る力を秘めていると考えられている。

因みにコロロイット(Korolovoi)の観念に触れておく。これは、意図しようとしまいと、武器の一撃で、一時に二人の敵または二頭の獲物を倒す事(一石二鳥)であり、本人や家族に死などの恐ろしい不幸をもたらさずにはいない行為または出来事の事である。

人々が最も恐れる事態は、他人に妬まれる事、なかでも超人間的な力を自由に駆使できる予言者達の嫉妬を買う事だ。彼等は無償で娘達を自分の嫁にしようとするし、彼等に逆えば子供達を皆殺しにされる。彼等と姻戚関係になれば、人々の言われなき恐怖を買わねばならない。そこで、子供達は、息子達の幾人かを、自分が父系自出原理によって属しているのとは異なるポリエット集団(76頁参照)に移籍する儀礼を執行する。更に、この息子達の成人後の父称を、自分の幼名の一つに因むけれども、他の息子達とは別のものにする。また、彼等を決して自分の息子とは言及しないように細心の注意を払う。

息子達のポリエット集団を変更するこの儀礼もまた「何かする事」と呼ばれる。即ち、「何かする事」儀礼とは、異常な逸脱現象を過剰状態からであれ、過度の不足状態からであれ、正常な状態に回復するための儀礼的な働きかけである事が判明する。逆にまた、「何かする事」の観念の分析を通じて、行動パターンにおいては、適度にマイナスである事が正常であり、ゼロである事と過度にマイナスである事が逸脱状況であると考えられている事を確認できるのである。

### 3 様々な逸脱現象と災因力

怪我、病氣、災厄、不幸などを逸脱原象と言う語に集約すれば、人々が全ての逸脱現象を超人間的な力によって説明する訳ではない。

女達は、誰もが、薬草の豊かな知識を持っているが、とりわけ造詣の深い者は、尊敬され、頼られている。喘息、リニューマチ、眼病、耳病などには、様々な薬物が調合されて施される。身体の方々に切り傷を入れて灰にした薬草を摩り込む事もあれば、煎じ汁を飲用する事もあ

る。麻疹や水疱瘡などには山羊の胃のスープを与える。矢毒の特効薬は婦人の経血だ。肋骨を除去し、骨を接ぐ事もある。瀉血や、脳内の血栓を山羊の角で吸い出す事もする。おたふく風邪や子供の夜尿症は、夫々の仕方——いわゆる感染呪術——で病気を特定の物にくっつけて、呪文を唱えて放り出すと直る。また、毒蛇にかまれたら、すぐに誰かと性交すればよいなど、誰にも理由の判らない対処法も少くない。

これらの逸脱現象は、比較的重大でない原因によって起ると言えよう。しかしながら、人類学でしばしば援用される妖術の説明に従えば、どんな些細な出来事である。直接の原因の背後にある力を想定する事が可能な筈である。例えば、或る人が石に躓いて怪我をした場合、怪我の直接の原因はその石に躓いた事だが、その人がその時にその石に何故躓かねばならなかったかを問う事は可能な訳だ。

だが、キプシギス族では、上記の軽微な逸脱現象では、そのような形で原因が背後迄探索されるのは稀である。だから、軽微な逸脱現象は、背後にある力の同定と、それに対する働きかけが行われずとも、対処的な方法だけ

で逸脱から回復できる範疇のものだと言える。

これに対して、現象の背後にある超人間的な力に究極的な原因が求められ、その力を同定し、それに働きかける事によってしか回復できない逸脱現象の範疇がある。この範疇に属するのは、急性の激しい病氣、進行性の慢性病、なじみのない病氣、家族や牛の連続死、妻の不妊、夫婦の子供達が育たない、相つぐ死産や流産、地域的な災害、野菜や穀物の枯死や不作等々の現象である。

特定の逸脱現象の原因が特定の超人間的力に求められる場合もあるが、大抵の場合、一つの現象に複数の原因を想定する事が可能であり、逆に、或る超人間的な力が多様な逸脱現象をひき起すので、回復のためには正確な原因の同定が肝要なのである。

この種の逸脱現象が生じると、まず家族が集って相談し、次に近隣組織が寄り合いをもち、それでも原因を同定できない場合には、女性の占師を訪ねて診断を仰ぐ。寄り合いの前に占師を訪ねる事もある。最近では、病氣と思えば、病院に行く事が多いが、治療効果があがらない場合は、結局占師に頼る。

この節では、以下に、この種の逸脱現象の原因となる、

邪術と死霊以外の力を紹介する。

3-1 「背信」と呪詛 「背信」とは、ゴギスト (*ng-gosistis*) の仮の訳語だが、ゴギストとは或る種の社会的規範の侵犯であり、なかでも、恩を忘れたり、恩を仇で報いるのが最も著しいものであると考えられている。

キプシギス族は、婚資としても、殺人に対する血償としても数頭の牛を支払う。また、牛疫や敵による略奪によって自分の牛を一挙に失う事を恐れて、遠方の友人達に牛を少しずつ預託する。牛乳は預り主のものとなる。

自家の暮しに必要な以上に増えた牛の少くとも半数を友人に預託する事が社会の掟であり、そうしない者は、極めて悪い評判をとる。このように、牛は、個人や集団が同盟関係を結び、或いは損われた同盟関係を修復するための最も重要な媒介であるが、重大な「背信」は、当然行われるべき牛の支払いや譲渡の不履行と関連して考えられる事が多い。「背信」の観念を具体的に知るために例を引こう。

事例1 Aは、友人Bと共に、グシイ族から雌牛を一頭略奪して来た。雌牛はAの家で飼われ、子孫が増殖した。AはBが遠方に住んでいるのをよい事に、騙し

続けて、約束された取り分をBに渡さなかった。これらの牛を婚資に用いたAの長男(C)の子供達は生後間も無く死んで一人も育たなかった。Aの次男(第三妻の長男)の第一妻の子供達は一人の息子を、第二妻の子供達は一人の娘を除いて、全員夭逝した。事を訝しんだ近隣組織が寄り合いをもち、Aの同年齡組の老人達によって、AのBに対する「背信」が原因だと判断された。Bの取り分の牛ばかりでなく、Aの取り分の牛も、Cの岳父からBに引き渡され、謝罪儀礼と去勢牛の供犠が行われた。

英語のケース (*case*) と言う概念は、言葉によって超自然的な力に訴えて行われる正当な攻撃である。これに對して、日本語の呪いとは、むしろ言葉や身振りによって超人的な力に訴えて行われる邪悪な攻撃を言う。キプシギスのチュビスイェット (*chubisiet*) はケースに近いが、正当性について多少の曖昧さが残り、呪いの要素も幾分内包されている。ここではチュビスイェットを呪詛と訳しておく。

「背信」を犯した者は、何時か必ず超人的な力によって制裁を加えられるが、この過程は、被害者が呪詛する

事によって促進される。強力な呪詛力を持つ氏族が幾つかあり、正体不明の犯罪者に向けられる、近隣組織による集合的な呪詛に責任を持っている。

キブシギス族では、重大な逸脱現象の大きな部分は、「背信」と呪詛に原因を求められる。この事實は、先に述べた人生観とも強い関連性を持つ。当り前に生きている限り、神は幸を約束してくれる筈だが、人は、何時何処で「背信」を犯していいとも限らない。それが現実の行動パターンだと考えられている。

3-2 ムマ 英語のオース(Cath. 宣誓)とは、自らの正当性の証明のために超人間的な力に訴えかける事である。ムマ(*muma*)は自己の正当性の主張のために行う行為である点ではオースに似るが、大きな違いもある。ムマでは、当事者双方が相互に呪詛し合い邪術をかける。その結果、必ず、当事者のどちらか一方に、家族が当事者との関係性の薄い者から順に次々と死んでゆくと言う、特徴的な不幸がもたらされる。当事者の一方が、鍛冶屋に依頼して秘かに一方的にムマを行う場合があり、この場合はオースと言うよりも邪術に近い面がある。

3-3 その他の力 この他には、ソゴラン(*sogo-*

*nan*)と言う、「不自然さ」とでも訳せる概念がある。これは、牛が尻尾を巻きつける、背の瘤を割る、犬や山羊や羊が屋根に登る、人間の乳房を吸うなどの行為をする事である。獣は殺され、家人が引越す事もある。近親相姦もこの範疇に入り、不妊をもたらす。

グワニンド(*ng'wanindo*)とは、「*ng'wa*」「*ni*がさ」に相当する語で、殺人、死体との接触、割礼前の娘の出産などによって生じる状態の力だ。この状態にある者は、雄羊を供犠し、尾の脂を塗布される事によって浄化されるが、それに先立って数日間人々から隔離されなければならない。

ニギス(*nyigis*)は「重さ」と訳せ、出産、ロバの死、イニシエーション諸儀礼を受けている最中の者の死などによって生じる状態の力で、後二者は、接触した者に死をもたらず。左利きの印付きの女性も「重さ」をもっているのも、第一妻になれない。

スイムウェック(*simwech*)は性交後に生じる「汚れ」で、この「性交の汚れ」を持った人が通りかかると、病人や妊婦が影響を受ける。姦淫による「性交の汚れ」は強く、相手の伴侶はこれに犯されれば死ぬ。



ケレック (Kerekh) は赤ん坊が持っている「汚れ」であり、父親だけが触ると犯されて痴呆化する。

ムトゥリアット (muturiant) はイニシエーション諸儀礼を受けている者の汚れで、他人を愚鈍にする。

各種の汚れは、姦淫による「性交の汚れ」を除いて、水で洗えば流れ落ちる。

キプシギスには、タブーに当る概念も語も無いが、例えば、後向きに戸口から出るとか、家などの境界越しに握手を言ったと言った非常識な行為や逆立した行為もまた、他人に不幸をもたらすと信じられ忌み嫌われる。

#### 4 死霊

死霊も、「背信」や呪詛、邪術と並んで、逸脱現象の主要な説明原理の一つである。ここで言う死霊とは祖霊の事である。不幸をもたらすのは祖霊に限られ、それ以外の死霊が人々を苦しめるのは極めて例外的である。<sup>(2)</sup>

キプシギス族の祖霊観を知るうえで重要なのは、祖先の霊魂が子孫の新生児に再来すると言う観念である。胎児がこの世に生をうけるためには、祖霊が分婁と同時に新生児に入り込んで、その子の魂にならなければならぬ

い。赤ん坊が生まれると、同性の祖先の名が次々と呼びあげられ、赤ん坊がくしゃみをした時点で名前を呼ばれていた祖霊が入り込んだものとされる。この祖霊は招請霊 (kurenu) と呼ばれ、招請霊の名前が幼名の一つである祖霊名としてその赤ん坊に与えられる。家族の者は、自分と招請霊との関係に基づいて、オジイサン、オトウサンなどとその子と呼ぶ。

祖霊達は、子孫に再来する事に強い関心を持っている。新生児の最初の吸気と共にその体中に入り込もうと、複数の祖霊が殺倒すると難産になるが、何らかの理由から祖霊が入り込む事を拒むと、不妊や死産が結果する。<sup>(3)</sup> 父系出自社会であるキプシギス族では、入り込むべき祖霊がないのだから、私生児は、何処かの死霊が紛れ込むのを防ぐために、産声を挙げる前に土で鼻と口を塞いで殺さなければならぬ。招請霊の同定を誤って赤ん坊に別の祖霊の名前をつけると、招請霊は何時迄も赤ん坊に口を利かせないとか、這わせて歩かせないとか、病気がちにして苦しめる。これらの現象は招請霊の異議申し立ての典型的な兆候なので、すぐに命名儀礼をやり直して、正しく招請霊を同定しなければならない。<sup>(4)</sup> 招請霊は守護

霊とはならず、入り込んだ者を取り殺して了う事もあると言われ<sup>(5)</sup>。

死霊は、決して親愛の対象ではなく、飽く迄も、恐れ遠ざけられる。死霊は、子孫の道徳性とは必ずしも関係なく不幸をもたらす非道徳的な力である。死霊は、往々、子孫を恋しがって、或いは唯単にビールや肉を飲食したいがために子孫を苦しめ、兆候を媒介にして意志を子孫に伝えようとする。祖霊界で夫婦喧嘩した死霊が自分の言い分を子孫に聞いて貰いたくて苦しめる事さえある。

事例2 ある女性が、結婚後三年間不妊だったので占師に診て貰ったところ、彼女の夫の父である死霊が、実の娘に会いたがって苦しめていた事が判明した。この死霊は、自分の山羊を食べたがってもいた。だが、死後一八年経っており、また彼の山羊の子孫の殆んどが病気で死に絶えていたために、「彼の山羊」を見つけてるのは困難を極めた。やがて不妊の婦人の家の外の祭壇で「彼の山羊」が供犠され、心臓、肝臓、胃、腸、舌、あばら、後肢から、夫々一インチ角程の肉片が切り取られ、半割りの瓢箪に入れて、死霊に供えられ

た。次に、ほぼ同様の肉片が別の半割瓢箪に収められ、その死霊の妻、即ち件の婦人の夫の母親である死霊に供えられ、平穏な暮しを願う祈りが神に捧げられ、死霊達は子孫に好意的であるようにと宥められた<sup>(6)</sup>。

これが、慰撫儀礼と死霊の性質を示す典型的な例である。とは言え、死霊が子孫に不幸をもたらすに足る(正當な)根拠を持っていない場合も少くない。悪業の故に秘かに家族に殺されたり、看病を受けずに死んだり、生前家族に虐待された者の死霊は苛酷に害をなす。埋葬の遅れた者の場合も同様だ。父親は長男が、母親は末男が埋葬しなければならぬ。彼等が不在なら別の親族が責任を負うが、キプシギスの人々が近親のものであっても死体との接触を極度に恐れるのと、氏族が全土に広く分散しているために、往々埋葬が遅れる。すると死霊は、家族の子供達を順々に殺し始める。この場合にも、ビールを醸し、山羊を供犠して、事例2と同様の慰撫儀礼が行される。

氏族は、外婚単位であると共に、血償の支払いと受け取りの単位でもある。血償の取り立てが遅滞したり、その額が小さ過ぎると、死霊が氏族の者を害し始める。だ

が、血償がきちんと受け取られる限りは、死霊は、どんなに理不尽で残酷な殺され方をしていようと、決して氏族の人々も、殺人者の氏族の人々も苦しめたりする事はないのである。

## 5 邪術

ここでは、邪術を、人類学で言うソーサリー (sorcery) ではなく、超人間的な力に訴えて行う邪悪な攻撃一般を広く指すものとする。邪術一般に広く対応するのはポニスイエット (ponisiet) と言う概念である。ポニスイエットとは、本来、物を用いる邪術の事である。邪術者 (ponindel) には次の下位区分がある。邪術婦 (ponindel) は、最も狭い意味での邪術を行う者で、女性であり、「感染呪術」によって共妻を初めとする他の女性の子供を殺すが、牛には攻撃しない。影や足跡を掬い、これを通してゴミを身体に入れ込む術を使う者は「嫉妬女」 (chepsunio) と呼ばれる。「邪妻」 (chepkwombio) は夫だけを攻撃し、彼を意の儘に制御する者である。「赤ん坊の汚れ」 (82頁参照) のついた手を洗わない妻も邪妻と見做される。邪術婦や「嫉妬女」は同時に邪妻でもあ

る事が多く、夫に正体が知られると「妻の邪術」の力を用いて夫を支配して了う。男の邪術者は「臆使い」 (schuain [tad]) と言い、他人の牛の体内に獣の臆を入れ込み、内臓を縛って殺すが、人間は攻撃しない。「臆使い」に類するのは「虱持ち」で、大量の虱を牛——主として雄牛——に付ける。「虱持ち」はカプコルウォレック氏族の者に限られる。また、「愛の感染呪術」も邪術と考えられているが、この事実からも過剰な幸は例外的な果報であり、嫉妬され、邪術が行使されている疑いが常にかげられ得ることが窺い知られよう。これらの邪術は、母から娘へ、父から息子へと相続されてゆく。

以上が狭義の邪術だが、「邪視」がこれに近い力である。眼に強い力を宿している男性が、赤ん坊や幼獣、瓢箪、イニシエーション過程にある者など「やわらかい」ものを見るとそれらに危害が及ぶ。だが邪視は、狭義の邪術のように意図的に相続されるものではなく、生得の属性であり、一種の病気だと考えられている。女性の側でこれに対応するのが「邪影」と言う力または病気で、これを持つ女性の影が落ちた所に触れると、妊産婦が病気になる。邪視も邪影も本人に攻撃の意図が無い点から

も狂義の邪術とは考えられない。

但し、邪視者は、早朝暫くの間太陽を見つめて眼の力を減退させる事と、「やわらかい」ものには視線を向けない事とが、邪影者は、妊産婦のいる家や場所に接近する場合に、事前に声をかけて接近を通報して、不幸な事態を回避する事が、当然の義務だと考えられている。この義務を果さなかったり、意図的に邪視や邪影を用いた場合には、邪術者になる。

このように整理してみると、邪視や邪影は、各種の「汚れ」や「重さ」、「きつさ」などに近い力である事が判る。その差は力が恒久的か一時的かの差に過ぎない。汚れの状態にある者が、課せられた規制に違反して行動すれば、他人に危害が及ぶ事になり、違反者は邪術者とされる。即ち、本来は正当性については中立であり、攻撃性を持たない諸方も、結果として危害をもたらせば邪術と見做されるのである。

次に、少くとも部分的には社会的な効用を認められた正当な方も、同様に、結果として邪術と見做され得る事実<sup>(fact)</sup>に留意しておく必要がある。占師は「占夢」(sagittiv-nae)と云う力を持ち、守護霊と交流してヴィジョンを

得、事の真相を知り、病気を癒し、不幸を取り除く事ができる。従って占師の社会的な役割は極めて重要なものだが、占夢の力の意図的な操作者とも見做され、人々の占師に対する感情は両義的であり、占師は往々呪詛などの対象となっている。逸脱現象の解釈の大きな部分は占師が関りをもつからである。

予言者は、部族間の戦争と略奪戦が盛んだった当時には、勝利と戦果を得るために、事前に必ず相談を受ける、なくてはならない社会的存在だった。だが、予言者は、気象を自在に操作できる程強力な力を持つが、故意に天災を起し、それを改善する事で人々から報酬を得て蓄財する輩とも見做され、大いに恐れられた。彼等の行為も邪術に分類され、今日では社会的効用を全く認められておらず、唯々恐れられている。

呪詛は「口による邪術」とも呼ばれる。部族内部の牛泥棒は、盗んだ牛が怯えて鳴き声を立てると、「お前が飼い主に災をもたらすように!!」と呪詛しながら舌を切り取ると言う。

キプシギス族の人々は、腹の白い或る種の鷺が神意を伝えると信じ、この鷺を「兆」と呼ぶ。重大な用件があ

って旅をする時には、怠りなく、自分とこの鷲との相対的な位置関係を知り、吉凶の兆を正確に読みとって、相応の行動をとらなければならぬ。私の隣人の一人が、幾度旅に出ようとしても鷲の告げる兆が常に悪いのに腹を立てて、この鷲を呪詛して落して了ったと伝えられている。

盗まれた牛や鷲の行動は、これらの呪詛者にとっては不都合であっても、本来は正当なものである。<sup>(9)</sup>それを呪詛で攻撃するのであるから、この場合の呪詛は、カースではなく、まさに「口による邪術」に他ならない。

ムマの中でも「鞆の吹き口のムマ」は、最も強力で、恐れられる。近隣裁判の決定は、たとえ内心不服でも深く従うのが社会規範である。近隣裁判は、十分に時間をかけて妥協点を見出すように努めるが、再審はしない。今日では、裁判所へ控訴できるものの、裁判所でも九割以上は近隣裁判の決定が支持されるし、民事では、近隣裁判を済まさないければ裁判所に控訴できない。それでも、どうしても近隣裁判の決定ないしは「判決」に承服できない者は、鞆の吹き口を、夜間秘かに相手の家の庭木などに仕掛け、自分の正当性を主張し、相手を呪詛する。

攻撃者の言い分が正当であれば、吹き口を仕掛けられた者の子孫は絶えるであろう。ところが、攻撃者の言い分が正当かどうかに関りなく、累は攻撃者の子孫にも必ず及び、彼等も何時かは死に絶える。それ故、鞆の吹き口のムマに訴えようとする者は、攻撃対象の家に達する迄にできるだけ遠い道のりをジグザグに歩いて距離を稼ぐ。ムマの力は匍匐性の毒蔓草の如く、攻撃者の足跡を辿って、ジワジワと彼の子孫を捕えてゆくと考えられているからである。このムマは、一般的にはムマと言うよりもソイウェット (soiwet、鞆の吹き口) と言う力として知られており、狭義の邪術に極めて近似した力だと考えられている。<sup>(10)</sup>

以上に概観したように、邪術に対応するポニスイエツトと言う力の概念は、三つのレヴェルで捉えられる。即ち、最も狭い意味では、「感染呪術」による、女性の女性に対する攻撃である。次いで、社会が等しく正当性を認めない力による攻撃である。最後に、正当性に関しては中立な力や、一般に社会的な効用を認められた正当な力を悪用した攻撃である。

邪術の観念の分析から逆照射されるのは、超人間的な

表-1 キブシギス族の超人間的な力の種類と属性

種類	属性	行為者	被害者	手段			意図性	正当性
				物	言葉	身振		
ponindet (邪術者) chepsuriot (嫉妬女) chepkwombiot (邪妻) sakutin[-det] (隄使い) 虱持ち orkoiyot (予言者)		f	f	+	-	-	+	-
		f	f	+	-	-	+	-
		f	m	+	(+)	(+)	+	-
		m	牛	+	-	-	+	-
		m	牛	+	-	-	+	-
		m		+	(+)	(+)	+	-
sulisiet (邪視)		m		-	-	+	-	φ
mirutik (邪影)		f	f	-	-	+	-	φ
sogoran (不自然さ)				-	-	+	+	-
ng'wanindo (にがさ, きつさ)				-	-	+	+	(+)
nyigis (重さ)				-	-	+	-	φ
simwek (性交の汚れ)				-	-	+	-	φ
kerek (赤ん坊の汚れ)				-	-	+	-	φ
muturiat (ノヴィスの汚れ)				-	-	+	-	φ
soiwet (籬の吹き口)				+	+	+	+	-
muma (ムマ)				+	+	+	+	±
chubisiet (呪詛)				-	+	+	+	+
ng'ogisto (「背信」)				-	-	+	(+)	-
ko-rorot (一石二鳥)				+	-	+	-	-
mong'set (未必の故意)				-	+	-	(+)	+
kaberuret (祝福)				+	+	+	+	+
oindet (死霊)				-	-	-	+	φ
asis (神)				-	-	-	+	φ

力は、正当でない力とそれ以外の力とに大別され、正当でない力は不可逆的に邪悪だが、それ以外の力の正当性は相対的、可逆的で、何時でも邪悪な性質を帯び得るのだと言うキブシギス族の超人間的な力観だ。<sup>(1)</sup>

6 結論

本論文の目的は、一橋大学学術調査団による「環ヴィクトリア湖地域のエスノヒストリー手法による総合社会

調査」参加者の一人として、研究対象となった諸部族の災因論を文化動態論の視点から比較研究するための材料を提供するために、死霊と邪術の觀念とを対照しながら、キプシギス族の災因論の構造の概要を明らかにする事であった。だが、キプシギス族の災因論において、最も重要な説明原理は、やはり「背信」と呪詛の觀念であることが、結論として再確認できるようである。

死霊が危害を及ぼすのは、家族など氏族の者に限られている。理由は、死霊が子孫の関心を引ききたいためであるが、理不尽で身勝手なものである事が少くない。だが、死霊は、しばしば、老後の福祉、埋葬等の死後の安寧、血債の受け取りなど、氏族に課せられた義務を子孫が全うしない事に対して憤ってもいる。死霊がもたらす不幸は、殆んど出産や子供の生長に関するものである。また既に別の所で述べたが、キプシギス族の靈魂の再来、或いは「再受肉」の觀念も、母系の中央バントゥ語系諸族を初め東部及び南部アフリカにおける類似的の觀念よりずっと一貫性のあるものとは言え、やはり名辞的な性格が強い。父系氏族とは、一人の共通の先祖から、男性を通じて、系を辿る出自集団だが、子孫に先祖の名前を靈名

として与えて、如何にも先祖の一人の如く扱わなければ死霊が不幸をもたらすと言う觀念は、常に先祖に言及する事で氏族の団結と忠誠心を喚起する社会的機能をもっていると言える。

「背信」の觀念は、牛のやりとりの規則を初め、家族間や氏族間で守られるべき規範の違反に適用される例が多いようだ。事例1のような不幸な事態は、「牛が(人を)食う」と呼ばれる。娘と交換に得た婚資の牛は、父親のものではなく、兄弟が結婚するための婚資として用いられなければならない。これを、目的が何であれ、自分のために用いた父親は、「娘と寝た者」と軽蔑され、この逸脱行為はソゴラン(「不自然さ」——82頁参照)とされるけれども「背信」には当らず、「牛が食う」事もない。「背信」と呪詛の觀念は、道德モラル的な社会的制裁力として、多数の氏族の非分節的な連合体であるキプシギス族の部族社会において、氏族を超えた社会全体の秩序の維持に資する機能を担っていると見えよう。

反道德インモラル的な力である様々な邪術の觀念は、社会における男女夫々の関心のあり方や、女性間及び男性間の嫉妬を多彩に表現している。イニシエーション諸儀礼では、

理論的には「あらゆる」狭義の邪術が教えられるものの、この時教えられた邪術を実行する者は一人もいないと言われる。だが、この考え方は、成人した者は、誰でもが邪術者として告発される可能性をもっていることを、逆説的に示唆する。あらゆる規範の違反も邪術と見做される。この意味で、邪術の観念は、ネガティブな形ではあるが「背信」や呪詛と表裏一体をなして、社会全体の秩序を維持する機能を担っていると考えられよう。

一方、災因としての呪詛と死霊、及びその道徳性と非道徳性を判然と区別する事は、現実には必ずしもできるとは限らない。呪詛力の大きさの主要な根拠の一つは高齢である事だが、力の強さは限り無く死霊に近い存在となる事で極大化する訳である。家族の老人が死の直前に秘かに家族に呪詛したのが不幸の原因なのか、その死霊自体が苦しめているのか判然としない事例が往々ある。

死霊や呪詛を初め、一切の力の背後では、究極的には神の力が働いている。諸現象の原因の不確定性や、諸力の正当性の相対性は、神そのものの超越的で非道徳的な性質によっていると言えよう。人々は、造物主としての神を恵み深い者と考えようと努め、「背信」の観念によ

って自らの過失を認めようとするが、神は人間の意志や、理解や、道徳性を超越した存在なのだ。人々は、自分と家族や氏族との関係において、創造主たる神と同様の非道徳性を自分の存在の源である父親に、そしてその祖先たる死霊にも見てとっているのである。

- (1) 「何かすること」儀式を施された印付きの者は、イニシエーション儀式で、山羊の皮衣の代りに青猿カリスの皮衣を着用するが、*Paritany* (p. 21, note 5) は、その割合が三割から四割に達すると報告している。
- (2) 動植物には魂が無いと考えられている。
- (3) 印付きの者達は、死霊に強い関心を持たれているとき、何年かに一度集って特別な儀式を行って死霊達を慰撫しなければならぬ。この事実が、彼等の兄弟姉妹を殺したのが死霊である事を暗示している。
- (4) プロテスタントは、赤ん坊に霊名を与える事に反対しているが、或る信者が、赤ん坊が目に見えて不具化してゆくのに恐れをなして秘かに命名儀式を執行したところ、間もなく赤ん坊が健康を回復したと伝えられる。
- (5) 小馬、一五三—一五六頁。
- (6) Orchardson, 1961, pp. 127—128.
- (7) 但し、遠隔地で牛が突然分娩しそうになった時に、その雌牛の羊水を刀につけ、刀で雌牛の脇腹を打って分娩を制御する等の無害な呪術もポニスイエットに含められる。



以下、ホニスイエットを邪術と訳す。

(8) 或る人達は、逆に、邪視者が太陽を見つめるのは眼の力の強化のためだと言う。

(9) もっとも、この鷺は、鶏の雛を捕食するので、この点では忌み嫌われる。

(10) 鍛冶屋はムマの請け負い人として恐れられる。鞆も、勿論彼の用いる道具だ。

(11) 祝福 (*kabwural*) だけは一見例外と見えるが、モンゼット (78頁参照) は、祝福による攻撃とも言える。

(12) 小馬、一五六—一五七頁。

(13) 他方、呪詛についても、家族や親族の成員間の呪詛は最も強力だが、尋常ではなく、呪詛全体に占る割合も高くない。

#### REFERENCE

小馬徹、「キプシギス族の『再受肉』視再考」、『社会人類学年報』(弘文堂)、第八卷、一四九—一六〇頁、一九八二年。  
長島信弘、「未開から文明へ」、江藤、鶴見、山本編『ロミン

ニケーション史』(研究社)、五一—八三頁一九七三年。  
——、「呪詛と祝福」、『橋論叢』第八十五卷、第六号、一一—一八頁、一九八一年。

Barton, J. "Notes on the Kipsigis or Lumbwa Tribe of Kenya Colony", *Journal of the Royal Anthropological Institute*, III, pp. 42—78, 1923.

Orchardson, I. O. "The African Explains Witchcraft: II. Kipsigis", *Africa*, VIII, pp. 509—515, 1935.

——, *The Kipsigis*, Nairobi, 1961.  
Peristiany, J. G. *Social Institutions of the Kipsigis*, London, 1939.

Huntingford, G. W. B. "Nandi Witchcraft", in J. Middleton and F. H. Winter (eds.) *Witchcraft and Sorcery in East Africa*, London pp. 175—186, 1963.

LeVine, R. A. "Witchcraft and Wife Proximity in South-west Kenya", *Ethnology*, vol. 1, pp. 39—45, 1962.  
(大分大学助教授)